

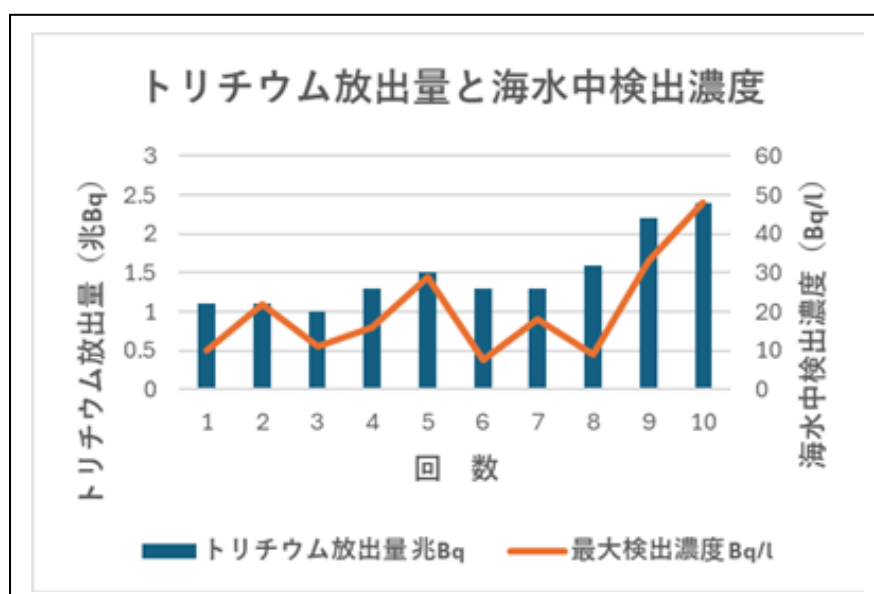
トリチウム汚染水の今

福島原発事故から15年目を迎えた。廃炉の入り口であるデブリ取り出しも一向に進まない中、汚染水の海洋放出は着々と行われており、3月中に11回目の放出が終わる予定である。加えて、先号でも触れたが、今年度から膨大な量の汚染土壌の全国拡散が始まる。条件次第では汚染土壌を受け入れてもよい、という自治体が秋田、千葉、兵庫、奈良、宮崎など5県ある。反対を抑えるために交付金で釣るのは目に見えている。高レベル廃棄物の処分と同じパターンである。そもそも事故を起こしたのは東電であり原発を推進したのは国である。「福島原発事故の責任が東電にも国にもない」という最高裁判決はこの国の愚かさを象徴している。このままでは海も国土も放射能まみれの日本になる。

汚染水放出の現状

2023年8月に始まったトリチウム汚染水の海洋放出はこの3月で11回目を迎えている。毎回7800m³放出するがトリチウムの放出量は徐々に増えている。1回目は1.1兆Bqだったが、10回目（昨年10月17日～11月4日）は2.4兆Bq、11回目は3兆Bqの予定である。その結果、近海の海水中濃度は（排水口から3Km）次第に上がっている。1回目は1リットル当たり10Bqで、ほぼ検出限界に近かったが9回目は33Bq、10回目は48Bqで明らかに自然界濃度より高く（約5倍）、次第に上昇している。これは筆者が以前指摘したように、放出当初はマスコミ報道も考えて少なく見せ、世論が気にしなくなったら放出量を増

やす、という東京電力の画策である。これまでに放出した汚染水の量は47,140m³、全体の28分の1である。単純計算ではあと40年以上かかる。加えて今も毎日80m³の汚染水が発生している。トリチウム量でみると総量860兆Bq、これまでに放出した量は10.3兆Bqで全体の83分の1に過ぎない。現在の濃度で放出を続ければ280年掛かる。勿論、半減期〈12.4年〉もあるので当然これよりは減るが、それでも100年以上はかかる計算になる。従って、東電の予定通り30年間で全て放出するとなれば、今後更に高濃度で放出せざるを得ない。数年後には魚の汚染も増えるだろう。



国も東電もすべてはその場しのぎの事故対策であり、市民や未来世代の事など眼中にない。汚染土壌の拡散も同じような展開になるだろう。海洋放出の費用は当初34億円で最も低コストと言ったが、この2年半で既に430億円（東電）がかかっている。漁業者への支援は800億円、合計1200億円、原資は全て消費者の税金と電気料金から支払われる。

（3月13日 河田）